

# ジャマヒリーヤ博物館

—リビアの首都トリポリを訪れて—

青木真兵

2008年11月上旬、私はリビアを訪れた。リビアは北アフリカに位置し、地中海に面する。東の国境をエジプトとスーダン、西の国境をチュニジアとアルジェリアに接している国である。1人では入国に手間がかかるという理由で、西遊旅行社の企画するツアーに参加することになった。ドバイを経由してリビアの首都トリポリに到着するまで、約20時間の旅である。

今回訪れたジャマヒリーヤ博物館はリビアの首都トリポリの中心に位置する。博物館へ入ると、エントランスには後4世紀に造られた巨大な墳墓や、後1世紀もしくは2世紀に作られた大理石のヴィーナス像、そしてカダフィ大佐が革命の直前に使用したフォルクス・ワーゲンまでもがホールを取り囲むようにして配置され、私たちを出迎えてくれる。博物館自体は地上階、1階、2階、3階という4つの階層から構成されており、まず地上階では、旧・新石器時代の数多くの石器やサハラ砂漠に点在する洞窟壁画の複写を見ることができる。壁画には人びとが槍や弓を用いて巨大な牛を獲ようとしている様子が描かれており、遠い原始社会に生きる人びとの必死の営みが甦ってくるようだ。私たちは壁画に描かれているサイや牛などの動物を、今ではサハラにおいて決して見ることはできない。古代においてサハラは、緑豊かな土地だったことがわかる。

次は古代地中海世界に関する展示である。古代ギリシア・ローマ時代、リビアの沿岸部は西と東に区別されていた。西部地域はフェニキア人によって建設された都市が3つあったことから三都市「トリポリス」と呼ばれ、この地域は「トリポリタニア」という名称で形成されていく。首都トリポリの語源である。また東部はギリシア人の都市が5つあったことにより五都市「ペンタポリス」と呼ばれた。

フェニキア人に関する展示も若干であるが見ることができる。その中には砂岩で作られたフェニキア人の彫像が含まれていた。フェニキ

ア人に関する展示スペースを通り過ぎると、ギリシア人にまつわる品々が並ぶ部屋へと続く。アテネやミネルヴァ、ディオニュソスなどの古代の神々を表す大理石の彫像と共に、特徴的なギリシアの黒色土器やランプ、燭台に至る日々の生活用品も展示されている。

そして次は胸像や彫像、モザイクが所狭しと立ち並ぶローマ時代へと足を踏み入れることとなる。ローマ帝国の支配の下で、トリポリタニア地域は都市レプティス・マグナを中心に大きな発展を遂げた。この場所に展示されている彫像は、レプティス・マグナから持って来られたものが多く、前のギリシア・ゾーンで見たような神々の姿ではなく、神々と同一視された皇帝の姿を表している。それら全ては十分な威圧感を、そして当時の人びとが抱いたであろう畏怖の念までも現代に伝えている。一方、展示されているモザイクは大理石製の白一色の彫像とは打って変わって色鮮やかである。そこには四季の様子や食べ物、海で働く人びとや数多くの魚と戯れる神々の様子が描かれている。



階段を上がると1階である。そこにはローマ時代のコインやランプなどの小さな遺物が、薄暗い照明の中で浮かび上がるように幻想的な展示がなされている。壁際に並ぶ胸像も現在に蘇ってくるかのようなリアリティを持っている。地上階と1階は吹き抜けになっており、地上階では見上げていた大理石の彫像群を俯瞰することができる。

2階はイスラームの都市的文化と遊牧民の生活形態が中心に展示されている。都市的文化の品々として、緑と黄色で彩られた幾何学文様がデザインされた器や、金属で作られた水差しなどがある。遊牧民の生活を表すには民族衣装を着た人形が用いられ、彼らの住空間が再現されている。私はこの展示からリビアには幾つもの民族が存在していることを知り、リビアを「イスラームの国」として画一的に概括することは決してできないことを学んだ。



3階は主に帝国主義との戦いの時代とリビアの自然史に主題がおかれている。前者に関しては、イタリアに対する解放運動を行い1931年に処刑されたオマル・ムフタールや、1969年に無血革命を達成した現リビアの指導者カダフィ大佐の写真やその記録が飾られている。また自然史に関する展示はリビアの自然環境がいかに過酷であるかについて物語っている。リビアの国土は日本の約4.6倍にも関わらず、人口は600万人と日本に比べ圧倒的に少ない。それは人びとが生活できる環境が沿岸部に限られているからであり、それ以外は砂漠が広がっているためである。

以上のように、この博物館ではリビアという国がいかに多種多様な人びとの流入とその興亡の末に出来上がっているのかということを知ることができた。サハラが緑に溢れていた頃はこの地に住む土着の人びと、交易の民として地

中海を横断したフェニキア人、現在まで残る美の形式を作り上げたギリシア人、それら全てをまとめ上げて帝国を築いたローマ人。ローマ帝国滅亡後、イスラーム文化圏を構成して現在に至るアラブ人。リビアの「歴史」はこれらの人びとの営みの上に形成されている。

実際に、現在博物館の建っている場所はもともと古代ローマ時代に公共浴場として使用され、それがイスラームの時代には要塞として改築されたのであった。それから現在に至るまで権力者はこの建物を利用し続けてきた。ヨーロッパにおいてローマ人が造った町であるということは、「伝統的な町」であるということの意味し、町の人びとはその事実を誇る。ローマン・カトリック、神聖ローマ帝国、果てはナチスの第三帝国まで「ローマ」とのつながりなくしてはヨーロッパを語ることはできない。しかし北アフリカは事情が異なる。ローマ帝国滅亡後、ゲルマン民族の侵入を経てイスラーム勢力が居を構えた際、ローマ人が造った都市はことごとく破棄された。北アフリカにおいて、都市トリポリやこの博物館のように人が古代より継続して「同じ場所」を利用し続けている例は少ない。その理由として、ヨーロッパのアイデンティティともなっていくローマ帝国とイスラーム勢力の間には大きな「断絶」が存在するから、と私は考えている。この観点から見るとトリポリはその「断絶」を架橋している。そしてそれはこの地が持つ多様性に求められるのかもしれない。旅行者はこの博物館において、その多様性に実感として触れることができるのである。

